

令和7年度 全国学力・学習状況調査の大磯町結果の分析について

大磯町教育委員会

1 はじめに

大磯町では、学校における児童生徒への教育指導の充実や学習状況の改善等に役立て、継続的な検証改善サイクルの確立を目的として、文部科学省「令和7年度全国学力・学習状況調査」を令和7年4月17日（木）及び18日（金）に実施しました。

本調査は、小学校第6学年及び中学校第3学年の全児童生徒を対象としたもので、大磯町は小学生260名、中学生218名が参加しました。（※児童自立支援施設おおいそ学園内にある大磯町立国府小・中学校生沢分校に在籍する児童・生徒も含む。）

令和7年7月14日（月）、同31日（木）に公表された文部科学省からの調査結果を受け、令和7年度大磯町「全国学力・学習状況調査」結果分析・活用検討委員会を組織し、大磯町における児童生徒の学力・学習状況を把握・分析してまいりました。このたび、調査結果の報告がまとまりましたのでお知らせいたします。

なお、本調査により測定できるのは学力の特定の一部分であり、学校における教育活動の一側面に過ぎません。このことに留意して、町として教育施策・教育活動の改善に努めてまいります。

保護者・地域の皆様には、本調査の目的及び結果公表の趣旨をご理解いただくとともに、大磯町の児童生徒の健やかな成長のために、公表資料を有効にご活用いただきますようお願いいたします。

2 調査の内容

- ・教科に関する調査（国語、算数・数学、理科）

※中学校理科についてはCBT方式^{*1}にて実施

- ・生活習慣や学習環境等に関する質問紙調査（児童生徒に対する調査、学校に対する調査）

*1 CBT方式：コンピュータを用いて画面上で問題を回答するテスト方式

3 調査の結果について

（1）教科別調査結果

〔小学校〕

	平均正答数	平均正答率	中央値	標準偏差
国語	9.1 問/14 問	65%	10.0 問	3.0
算数	8.5 問/16 問	53%	8.0 問	3.9
理科	9.5 問/17 問	56%	10.0 問	3.9

〔中学校〕

	平均正答数	平均正答率	中央値	標準偏差
国語	7.8 問/14 問	56%	8.0 問	2.8
数学	7.5 問/14 問	50%	7.0 問	4.3

※平均正答数：児童生徒の正答数の平均。（正答数の平均/総問題数）

平均正答率：児童生徒の平均正答数を百分率で表示。

中央値：集団のデータを大きさの順に並べたときに真ん中に位置する値。

標準偏差：集団のデータの平均値からの離れ具合（散らばりの度合い）を表す数値。

標準偏差が0とは、ばらつきがない（データの値が全て同じ）ことを意味する。

〔中学校〕IRT 分析結果（中学校理科のみ CBT 方式にて実施）

	平均 IRT スコア	標準偏差
理科	504	108.7

※ 全国学力・学習状況調査で用いる IRT について

IRT（Item Response Theory）

：国際的な学力調査や検定試験等で採用されているテスト理論。この理論を使うと異なる問題から構成される試験・調査の悔過を、同じ物差し（尺度）で比較することが出来る。同じ正答数でも、難しい問題を解けた生徒は、より高い力として評価される。

IRT スコア：IRT に基づいて各設問の正誤パターンの状況から学力を推定し、500 を基準にした得点で表すもの。単なる正答数ではなく、難しい問題にどの程度正解できたかを反映している。

（２）教科に関する調査の結果から

【小学校国語】

今回出題された学習内容について、大磯町の調査結果は、全国及び県の平均正答率と比較し、大きな差異は見られませんでした。内容ごとに問題を分析すると、学習指導要領の領域において、知識及び技能のうち「言葉の特徴や使い方に関する事項」に該当する問題の無回答数の多さや、思考力、判断力、表現力等のうち「書くこと」「読むこと」といった、解答として文章を書く問題において課題があることがわかりました。

○主な特長と課題

特長（習得の状況が良好であると判断できるもの）	課題（指導の改善・充実が求められるもの）
<ul style="list-style-type: none"> ・自分が聞こうとする意図に応じて、話の内容を捉えることができる。 ・時間の経過による言葉の変化や世代による言葉の違いに気付くことができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・目的や意図に応じて簡単に書いたり詳しく書いたりするなど、自分の考えが伝わるように書き表し方を工夫すること。 ・学年別漢字配当表に示されている漢字を文の中で正しく使うこと。 ・目的に応じて、文章と図表などを結びつけるなどして必要な情報を見付けること。

○授業の充実に向けて取り組んでいくこと

- ・児童が文章の目的・意図に応じて明確かつ具体的に表現できるよう、読み手の視点から具体化のための要点を話し合い、多様な表現方法を相互に学ぶ取り組みを行う。そこから得られた気づきを価値付け、整理するような指導を行う。
- ・漢字を書くことについて、同音異義語から文章に合う漢字を選ぶ力を付ける。その際、第5学年及び第6学年の〔知識及び技能〕の(1)言葉の特徴や使い方に関する事項との関連を図り、指導の効果を高める。
- ・文章中の図表などから必要な情報を抽出し、それらと文章との関連性を明確にすることで、内容をより深く理解し、解釈できるように、文章と図表などの情報を合わせて読んだり、複数の資料を関連付けて読んだりする指導を重点的に行う。

参考「令和7年度全国学力・学習状況調査報告書小学校国語（国立教育政策研究所）」

【小学校算数】

今回出題された学習内容について、大磯町の調査結果は全国及び県の平均正答率と比較し、若干の差異が見られました。内容ごとに問題を分析すると、学習指導要領の領域においては「B 図形」について、課題があることがわかりました。また、「A 数と計算」について、分数概念理解に課題があることがわかりました。

○主な特長と課題

特長（習得の状況が良好であると判断できるもの）	課題（指導の改善・充実が求められるもの）
<ul style="list-style-type: none">示された資料から、必要な情報を選び、数量の関係を式に表し、計算することができる。	<ul style="list-style-type: none">平行四辺形の性質を基に、コンパスを用いて平行四辺形を作図すること。台形の意味や性質について理解していること。数直線上で、1つの目盛りに着目し、分数を単位分数の幾つ分として捉えること。

○授業の充実に向けて取り組んでいくこと

<ul style="list-style-type: none">作図学習において、図形の作図手順と性質を関連付けて理解を深めさせ、コンパスの多機能性を活用し、作図に用いた性質とは異なる性質にも着目して図形を確認するような指導を行う。形の置き方が多様であっても、その図形の構成要素と位置関係に着目し、図形を適切に区別できるよう指導する。さらに、根拠を明確に説明させ、図形の普遍的な性質を理解させるとともに、他の図形についても同様の視点から考察を深めるような指導を行う。数直線を用いた分数の学習において、0 から 1 の区間の等分数に着目して単位分数を明確に捉えさせ、他の分数をその単位分数の構成要素として認識させるような指導を行う。誤った認識に対しては、単位分数の定義に立ち返り、分数の意味と表し方を正しく導き出すような指導を行う。 <p>参考「令和7年度全国学力・学習状況調査報告書小学校算数（国立教育政策研究所）」</p>
--

【小学校理科】

今回出題された学習内容について、大磯町の調査結果は、全国及び県の平均正答率と比較し、大きな差異は見られませんでした。内容ごとに問題を分析すると、「エネルギー」を柱とする領域においては、金属の性質や乾電池のつなぎ方などの知識・技能、「生命」を柱とする領域においては、花の作りや受粉についての知識・技能、「地球」を柱とする領域においては、結果を基に結論を導いた理由を表現する思考・判断・表現にそれぞれ課題が見られました。

○主な特長と課題

特長（習得の状況が良好であると判断できるもの）	課題（指導の改善・充実が求められるもの）
<ul style="list-style-type: none">赤玉土の粒の大きさによる水のしみこみ方の違いについて、【結果】や【問題に対するまとめ】を基に、他の条件での結果を予想して、表現することができる。顕微鏡を操作し、適切な像にするための技術が身に付いている。	<ul style="list-style-type: none">赤玉土の粒の大きさによる水のしみ込み方の違いについて、結果を基に結論を導いた理由を表現すること。身の回りの金属について、電気を通す物、磁石に引き付けられる物があることの知識が身に付いていること。乾電池のつなぎ方について、直列つなぎに関する知識が身に付いていること。ヘチマの花の作りや受粉についての知識が身に付いていること。

○授業の充実に向けて取り組んでいくこと

<ul style="list-style-type: none">・観察・実験の結果を整理し、表やグラフを用いて多角的な視点から考察を深め、具体的な数値を根拠として、より妥当な考えを構築し表現できるように指導を行う。・既習の知識を実生活や他分野と関連付け、実験の結果を振り返りながら統合的に整理することで、物質の性質に関する理解を深めるような指導を行う。・ものづくりでできた装置を図で表現したり、設定した目的を達成できているかを振り返り、修正したりする学習活動を行う。・理科教育において、科学的な言葉を用いた説明活動を積極的に設定し、観察や実験を通じて事物や現象の名称や関連性を正確に説明・整理できるような指導を行う。 <p>参考「令和7年度全国学力・学習状況調査報告書小学校理科（国立教育政策研究所）」</p>
--

【中学校国語】

今回出題された学習内容について、大磯町の調査結果は全国及び県の平均正答率と比較し、大きな差異は見られませんでした。内容ごとに問題を分析すると、思考力、判断力、表現力等「読むこと・聞くこと」「書くこと」について、問題形式別にみると「記述式」の問題について、特に課題が見られました。

○主な特長と課題

特長（習得の状況が良好であると判断できるもの）	課題（指導の改善・充実が求められるもの）
<ul style="list-style-type: none">・目的に応じて、集めた材料を整理し、伝えたいことを明確にすることができる。・相手の反応を踏まえながら、自分の考えが分かりやすく伝わるように表現を工夫することができる。	<ul style="list-style-type: none">・自分の考えが伝わる文章になるように、根拠を明確にして書くこと。・資料や機器を用いて、自分の考えがわかりやすく伝わるように表現を工夫すること。・文章の構成や展開について、根拠を明確にして考えること。

○授業の充実に向けて取り組んでいくこと

<ul style="list-style-type: none">・提案や企画など、相手や目的を明確にして自分の考えを簡潔にまとめて書くような学習場面において、自身の考えを明確に伝える文章を作成するため、確かな事実に基づいた根拠を具体的に示し、接続する語句や指示する語句を適切に用いて意見と根拠の関係を明確にするような指導を行う。・スライドの改善案を検討するような学習場面において、資料や機器を用いた表現について伝えたい内容が効果的に伝わるよう、話の要点、根拠、中心となる事項が強調されているか、説明不足の有無などを確認し、それらの活用方法を検討・改善するような指導を行う。・あとの展開を予測しながら作品を読み、文章の構成や展開の効果について考える学習場面において、文学的文章の構成および展開を深く理解させるため、場面や登場人物の心情変化を基にその理由と効果を考察させ、生徒がその意義を実感できるような指導を行う。 <p>参考「令和7年度全国学力・学習状況調査報告書中学校国語（国立教育政策研究所）」</p>

【中学校数学】

今回出題された学習内容について、大磯町の調査結果は全国及び県の平均正答率と比較し、大きな差異は見られませんでした。内容ごとに問題を分析すると、学習指導要領の領域のうち、「D データ活用」においては確率の分野で、「B 図形」については証明の分野で一定の成果が見られましたが、「A 数と式」「D データの活用」のうち、素数や相対度数の知識・技能に関することについては課題が見られました。

○主な特長と課題

特長（習得の状況が良好であると判断できるもの）	課題（指導の改善・充実が求められるもの）
<ul style="list-style-type: none">・必ず起こる事柄の確率について理解している。・証明を振り返り、証明された事柄を基にして、新たに分かる辺や角についての関係を見いだすことができる。	<ul style="list-style-type: none">・素数の意味を理解すること。・相対度数の意味を理解すること。・事象を数学的に解釈し、問題解決の方法を数学的に説明すること。

○授業の充実に向けて取り組んでいくこと

<ul style="list-style-type: none">・整数の性質に関する考察において、整数を多角的に分類し、素数の定義とその特性（1 が素数でないこと含む）を深く理解させるよう指導する。また、素因数分解の一意性と関連付けて 1 が素数に含まれないことの意義を認識させ、既存の整数の概念を、新たな学習内容と関連付け、より体系的な理解へと深化させる。・データの特徴を読み取る活動を通して相対度数の概念とその必要性を理解させ、大きさの異なる集団のデータを比較することで、分布の傾向を的確に捉え、根拠をもって説明できることを教授する。・日常生活や社会の事象から関数関係を理想化・単純化して抽出し、関数を活用した問題解決のプロセスとその有効性を実感させるような活動を取り入れ、指導を行う。 <p>参考「令和 7 年度全国学力・学習状況調査報告書中学校数学（国立教育政策研究所）」</p>
--

【中学校理科】

今回出題された学習内容について、大磯町の調査結果は全国及び県の IRT スコアと比較し、大きな差異は見られませんでした。内容ごとに問題を分析すると、元素記号や気体の性質に関する知識においては一定の成果が見られましたが、問題解決をするための課題の設定や、知識を基にして分析・解釈をすること、生命を維持するはたらきに関する知識という点で課題が見られました。

○主な特長と課題

特長（習得の状況が良好であると判断できるもの）	課題（指導の改善・充実が求められるもの）
<ul style="list-style-type: none">・元素を記号で表すことに関する知識及び技能が身に付いている。・気体の性質に関する知識が概念として身に付いている。	<ul style="list-style-type: none">・身の回りの事象から生じた疑問や見いだした問題を解決するための課題を設定すること。・小学校で学習した知識を基に、地層に関する知識及び技能を関連付けて、地層を構成する粒の大きさとすき間の大きさに着目して分析して解釈すること。・生命を維持する働きに関する知識を概念として身に付けること。

○授業の充実に向けて取り組んでいくこと

- ・見通しを持って科学的探究を進めるため、生徒が身の回りの疑問や問題から解決可能な探究課題を自己の言葉で設定できるよう指導する。その際、課題を見出しやすい具体的な自然の事物・現象を提示するような指導を行う。
- ・地層を構成する粒の大きさと水の浸透性の関連性を理解させるため、小学校での既習知識に基づき、粒径と間隙に着目した分析・解釈を行わせる。また、モデル実験を通じて得られた結果と実際の地層を関連付けて考察させるような指導を行う。
- ・観察した生物の共通点と呼吸に関する知識を関連付け、生命維持機能の概念的理解を深めさせる。その際、生物の共通点・相違点に着目した考察活動を促し、直接観察が困難な生物についてはデジタル教材等を活用する等、工夫して指導を行う。

参考「令和7年度全国学力・学習状況調査報告書中学校数学（国立教育政策研究所）」

（3）児童生徒質問紙調査の結果から

〔生活習慣・家庭学習に関する調査結果〕（抜粋）

質問内容	小学校（％）			中学校（％）		
	大磯町	神奈川県	全国	大磯町	神奈川県	全国
朝食を毎日食べている。	94.0	93.9	93.7	94.6	90.0	91.2
毎日、同じくらいの時刻に寝ている。	81.1	81.0	81.9	80.4	76.7	81.0
毎日、同じくらいの時刻に起きている。	89.5	90.7	91.0	89.2	90.6	92.6
自分には、よいところがあると思う。	90.9	87.1	86.9	84.6	85.7	86.2
将来の夢や目標を持っている。	85.8	81.9	83.1	74.6	66.2	67.5
人が困っているときは、進んで助けている。	94.5	93.6	93.7	89.2	90.4	90.9
いじめは、どんな理由があってもいけないことだと思う。	95.0	97.1	97.2	92.7	95.0	95.9
人の役に立つ人間になりたいと思う。	95.9	96.3	96.4	96.5	96.4	96.6
学校に行くのは楽しいと思う。	88.0	87.1	86.5	85.0	86.5	86.1

※数値には、「どちらかといえばしている、どちらかと言えば当てはまる」の回答を含む。

〔学びに向かう力に関する調査結果〕（抜粋）

質問内容	小学校（％）			中学校（％）		
	大磯町	神奈川県	全国	大磯町	神奈川県	全国
自分と違う意見について考えるのは楽しいと思う。	77.1	79.0	78.1	76.1	79.4	79.2
分からないことや詳しく知りたいことがあったときに、自分で学び方を考え、工夫することができている。	79.3	81.4	81.7	75.4	77.9	77.5
5年生までに（中学1、2年生のときに）受けた授業では、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいた。	80.3	81.1	80.3	73.8	79.9	77.7
学級の友達/生徒との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができている。	84.4	85.1	84.9	83.9	84.5	84.7
学習した内容について、分かった点や、よく分からなかった点を見直し、次の学習につなげることができている。	75.7	77.9	79.4	70.8	73.9	73.4

総合的な学習の時間では、自分で課題を立てて情報を集め整理して、調べたことを発表するなどの学習に取り組んでいる。	83.5	82.5	82.3	85.8	82.6	79.5
道徳の授業では、自分の考えを深めたり、学級やグループで話し合ったりする活動に取り組んでいる。	83.5	87.0	88.0	87.7	91.2	91.5
5年生までに（中1、2年生で）受けた授業で、PC・タブレットなどの ICT 機器を週3日以上～ほぼ毎日使用した。	74.8	78.7	71.7	96.1	58.0	53.2

※数値には、「どちらかといえばしている、どちらかと言えば当てはまる」の回答を含む。

◎児童生徒質問紙の質問への回答状況と各教科の調査結果を比較した時、以下のような質問項目で「当てはまる・どちらかといえば当てはまる」等の回答をした児童生徒では、各教科の平均正答率が高い傾向が見られました。（必ずしも因果関係を示したものではありません。）

【小学校】

- 分からないことやくわしく知りたいことがあったときに、自分で学び方を考え、工夫することが出来ている。
- PC・タブレットなどの ICT 機器で文章を作成することができると思う。
※「情報を収集する」・「情報を整理する」・「プレゼンテーションを作成する」ことができる、という項目でも同様の傾向が見られた。
- 国語の授業で、目的に応じて、簡単に書いたりくわしく書いたりするなど、自分の考えが伝わるように書き表し方を工夫して文章を書いている。
- 国語の授業で、目的に応じて説明的な文章を読み、文章と図表などを結び付けるなどして必要な情報を見付けている。
- 理科の授業で、観察や実験をよく行っている。
- 理科の授業で、問題に対して答えがどのようなになるのか、自分で予想（仮説）を考えている。
- 5年生までに受けた授業で、自分の考えを発表する機会では、自分の考えがうまく伝わるよう、資料や文章、話の組立てなどを工夫して発表している。
- 5年生までに受けた授業で、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいる。

【中学校】

- 読書は好き。
- PC・タブレットなどの ICT 機器で文章を作成することができると思う。
※「情報を収集する」・「情報を整理する」・「プレゼンテーションを作成する」ことができる、という項目でも同様の傾向が見られた。
- 国語の授業で、文章を読み、その文章の構成や展開に、どのような効果があるのかについて、根拠を明確にして考えている。
- 文字式を用いた説明や図形の証明を読んで、かかれていることを理解することができる。
- 自然の中や日常生活、理科の授業において、理科に関する疑問を持ったり問題を見いだしたりしている。
- 1、2年生のときに受けた授業で、自分の考えを発表する機会では、自分の考えがうまく伝わるよう、資料や文章、話の組立てなどを工夫して発表している。

- 1、2年生のときに受けた授業では、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいる。
- 学級の生徒との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、新たな考え方に気付いたりすることができている。
- 総合的な学習の時間では、自分で課題を立てて情報を集め整理して、調べたことを発表するなどの学習活動に取り組んでいる。

小学校及び中学校で共通している事項として、「自分と違う意見について考えるのは楽しい」と思っている児童生徒の各教科の平均正答率が高い傾向にあることがわかりました。また、読書が好きな児童生徒も各教科の平均正答率が高い傾向にあり、各家庭の蔵書量と平均正答率にも緩やかな相関がみられました。ICT 機器の利活用については、文書やプレゼンテーションの作成、情報収集、情報整理等ができる、と回答している児童生徒は平均正答率が高い傾向にあり、ICT 機器の使用頻度が高いほうが、その傾向が強く表れることがわかりました。一方で、学習において ICT 機器を使っているか、という項目については、時間が短い児童生徒の方において平均正答率が高い傾向にあり、学習への使い方の指導に課題があることがわかりました。

小学校と中学校の違いとして、小学校では、「人の役に立つ人間になりたい」「地域や社会をよくするために何かをしてみたい」と考えている児童の平均正答率が高いことに対して、中学校では「学校に行くのは楽しい」「普段の生活の中で、幸せな気持ちになることがある」と答えた生徒の平均正答率が高い傾向にありました。小学校と比較すると、より難しく多様化する中学校においては、学校に行くことそのものに対する肯定的な捉えが、学習意欲につながっているのではないかと考えられます。また、小学校ではそれほど強く見られず、中学校で顕著だった項目として「国語の勉強が得意である」「国語の授業の内容はよくわかる」という項目に肯定的に回答した生徒が、他教科においても平均正答率が高い、というものが挙げられます。学習理解の根幹となる国語力の向上が、他教科においても影響を及ぼすことになるということを示唆していると考えられます。

4 大磯町教育委員会から

町教育委員会では、本調査の分析結果を各学校へ提供いたしました。これを受けて、各学校では町全体の傾向を踏まえつつ、自校の詳細な結果分析と考察を実施し、教育活動における成果と課題を明確にしました。今後は、これらの成果を一層充実させ、また課題については全校一体となって解決に向けた努力を傾けてまいります。

今回の調査結果からは、本町において、児童生徒が全国および県平均と同程度の学力を概ね習得している状況が確認されました。一方で、一部の教科領域においては、さらなる指導の充実が求められる課題も明らかになっています。この点については、全教員が真摯に受け止め、改善に向けた取り組みを推進していきたいと考えております。

町教育委員会は、平成 29 年度より「大磯学びづくり研究推進事業」を拡充し、町内の全小・中学校を研究推進校と位置づけています。これにより、教員の資質向上と、日々の授業の質向上および充実に向けた努力を続けております。また、今年度からは、チーム担任制の試験的な導入や、小学校における教科担任制の段階的な導入といった新たな試みにも着手し、教育効果のさらなる向上に努めています。さらに、「日常授業の改善・充実のための小・中相互訪問事業」も、昨年度に引き続き展開し、異なる校種の教員が校区内の学校を訪れ、互いの授業実践について考察する機会も設けています。

大磯町の子どもたちは、多くの児童生徒が規則正しい生活を送っていることが伺えます。また、年齢を重ねるにつれて将来の夢や目標に対する意識が変化していく様子は、大磯町の教育が子

どもたちの未来に深く関与していることを示唆しています。今後も、より多くの子どもたちが充実した社会生活を実現できるよう、学校は地域と連携し、一丸となって彼らの成長を見守り支え続けていく所存です。

ICT 機器の利活用に関しては、昨年度に引き続き、使用率などで全国平均を大幅に上回る結果を保持しています。多くの児童生徒が、ICT 機器の活用が協働的な学びや深い学びに寄与すると捉えており、その効果的な活用は子どもたちの多様な資質・能力の育成において極めて重要な要素であると認識しています。今後も、これらの機器を適切かつ有効に活用できる環境を整備するとともに、さらなる授業研究と授業改善を一層推進してまいります。

学校運営協議会制度が定着しつつある大磯町の学校教育現場では、学校のみならず、地域および家庭と密接に連携し、一丸となって大磯町の子どもたちを育む体制の構築を進めております。学校への地域の関心や期待も強く寄せられていることを感じており、これからも地域に深く根ざし、地域とともに歩む学校づくりを目指してまいります。

Society 4.0 から 5.0 への移行が取りざたされる昨今、未来社会が大きく変貌を遂げる中で、本町の教育が果たすべき役割は一層重大です。未来を担う子どもたちが、激動の時代を主体的に生き抜き、自ら未来を創造できる力を育むことに、私たちは全力を注いでまいります。教育委員会は、全ての子どもたちがそれぞれの可能性を最大限に開花できるよう、教育環境の不断の改善と、必要な支援の拡充に取り組んでまいります。本町の教育が、輝かしい未来を築くための確かな礎となるよう、町民の皆様の、より一層の深いご理解と、教育への積極的なご支援を心よりお願い申し上げます。